

# 令和元年 11月5日 市長定例記者会見の要旨

## ■議題

### 1. 防災対策と支援について

#### (1) 姉妹都市・郡山市への災害支援

〔市長〕資料に基づき、概要説明

〔防災対策課坂本課長補佐〕10月24日から3名体制で1週間郡山市へ支援に入った。阿武隈川や支川の決壊で広範囲で浸水が発生。街中には、災害ごみがあり搬出作業が進んでいない。久留米市の業務で避難所の運営には直接携わってはいないが、視察をしてきた。13か所の避難所が開設してあり400名弱の方が避難していた。運営は、郡山市の職員1名と県の職員2名で対応。物資は足りており、落ち着いていた。日中は家の片づけで避難所には人がおらず、夜になると帰ってくる。家屋の消毒には3日従事した。多くの家屋が、床上浸水の被害を受けており、1,000件近い消毒の依頼があっていた。他の自治体と合わせて、3日間で約200件の家屋を消毒した。地区によっては1階が全て浸かっているところもあり、天井まで消毒するエリアもあった。広域での被害で災害ごみが大量に出ているが、郡山市にある2つの集積所のうち、1つが浸水していたため稼働しておらず、処理が追い付いていなかった。市内の運動場や体育施設が仮の受け入れ場になっていた。街中のごみは、郡山市と自衛隊が搬出していた。応急仮設施設の点検も行った。東日本大震災の時に建てられた仮設住宅が撤去されず400戸弱残っており、福島県から郡山市が譲り受けた。震災から時間がたっており、実際に部屋が使えるか点検を行い、3日間ですべての家屋を点検した。我々が行った第一陣の派遣では、まだ現場も混乱しており、日々の業務が動く状態であった。

〔記者〕久留米市の活動はトータルで3日間だったのか。

〔防災対策課坂本課長補佐〕消毒が3日間、仮設住宅の点検が3日間、ごみの仕分けで現場に半日携わった。

〔記者〕支援は行き届いている状態だったのか。

〔防災対策課坂本課長補佐〕ごみの処理や罹災証明の発行がまだできていなかった。今後、罹災証明が発行されると、それに付随するサービスや支援も出てくるであろう。応急家屋への入居などはこれからになるであろう。

#### (2) 「令和元年豪雨対策検討プロジェクトチーム」の設置

〔市長〕資料に基づき、概要説明

〔記者〕全庁的にメンバーを集めるとの説明だが、国や県の職員も入っているのか。

〔市長〕国や県と市と意見調整する場もある。先週、先々週と国に出向き河川、道路の陳情なども行っているが、久留米市としても更に強化していきたいと思った。プロジ

ェクトチームは、市の職員で作るものである。ハード対策では都市づくり推進担当部長が、ソフト対策では防災対策担当部長が会長となっている。森副市長のもと国との関係を強化している。

〔森副市長〕 今回のプロジェクトチーム委員会の委員長を務めることになった。昨年の豪雨では、国県市で構成する河川連絡会議が立ち上がった。それまで、県が管理する市内の河川は、国県市でどのように管理していくかを取り決め、地元の方の意見を聞いて進めてきた。今回のプロジェクトチームでは、市が管理する河川を、しっかり責任をもって管理していくため、ハード面を検討していく。また、ソフト面では、避難所運営や避難勧告、指示などの情報提供をどのようにして行っていくかを検討していく。国や県のアドバイスをもらいながら、治水期に入る来年6月頃までには実行していく。この半年ではできないハード面の対策でもすぐには無理でも、来年度中には具体的な検討を進め、再来年度には事業実施につなげるようにやっていきたい。

〔記者〕 筒川をあげているが、課題をどう考えているか。貯留管などすでに治水対策をしている中で、今度どのようなことができるかと考えているのか。

〔森副市長〕 すでに対策はしているものの、対策の前提となっている雨量を今年の雨量がはるかに超えていた。頻度が多く発生することも前提に考えていかなければならない。貯水槽を建設することが有効な対策だとしても、コストや時間の問題もある。それ以外の方法も含めて、どういう対策が筒川の氾濫を抑制することができるのかを考えていかなければならない。

〔記者〕 筒川が市の中心部を流れていて、消防や警察などが集中している地域だから必要だと考えているのか。

〔森副市長〕 サブグラウンドを調整地として機能させるようにしていたが、今回の結果からすると、それだけでは受け入れきれなかった。流域的な治水対策を考えなければならぬ。

〔記者〕 ハード対策には筒川や鳥飼周辺をあげているが、西田周辺や鳥飼周辺は国や県も対策を進めており、そことの関連性は。それ以外の地域はどうするのか。

〔森副市長〕 今年の水害で氾濫したエリアを重点的に考えていく。国県が関与している河川でも、治水事業以外に何らかの対策ができるのではないかと考えている。総合的な治水の考え方が有効であると考えている。

〔記者〕 来年の治水期を目指すようだが、それまでもできることもあるのでは。ハザードマップの周知など、前々からやっていかないと浸透しないのではないかと。去年の災害から1年あったにも関わらず、ずれ込んでいたこともあったのではないかと。

〔森副市長〕 様々な機会を捉えて周知していかなければいけない。来年の5月頃にまとめてやる考えはもっていない。そのためにもまずは、市役所内でプロジェクトチームを作り、関係するセクションで役割分担を決めて実行をしていきたい。

〔記者〕 このプロジェクトを市長が設置しようと思ったきっかけは。台風19号か。

〔市長〕 総合的に考えた。これまでも都市建設部にあった部署を全庁的に対応する総務部に移管したが、まだまだ不十分だと考えた。台風19号を受け、河川本流の堤防決壊や長野新幹線が水に浸かるなど、これまでの常識では考えられないことが起こっている。これが、もし久留米市で起こったら、という強い問題意識をもちこのプロジェクトの立ち上げに至った。

【記者】台風19号からの問題意識の中で、今特に進めるべき課題は。

【市長】これまでの常識や、役所の縦割りにとられるのではなく、全てのことを考えることである。国県と連携するためにも、まずは久留米市が盛り上がらないと伝わらない。国も今、台風19号の対応で手いっぱいであり、九州の被害が風化しないように、しっかり訴えていかなければならない。これまでの延長ではいけないという強い思いで、今回のプロジェクトに至った。

## 2. 市政の動き

(1) 久留米市企業立地セミナーを東京で開催

【市長】資料に基づき続けて概要説明（質疑なし）

(2) ゆるキャラグランプリくるっば最後の挑戦結果報告および久留米初演100周年記念演奏会「第九」の告知

### くるっば登場が会見場へ

【シティプロモーション課】最後の挑戦と決めて、参加したゆるキャラグランプリ2019の最終決戦が11月3日に長野県で開催されました。結果、くるっばは、第9位で見事目標のトップ10入りを果たすことができました。市民の皆様をはじめ、多くの方に応援していただきありがとうございました。誕生以来7年連続で参加したゆるキャラグランプリへの挑戦はこれで終わりますが、久留米の知名度向上と久留米ファンの拡大に向けて、くるっばはこれからも走り続けます。これからも応援よろしくお願ひしますっば〜。

【市長】くるっば、おめでとう。念願のトップ10入りでしかも9位。実はこの9位は大変深い意味がある。久留米初演100周年記念演奏会ベートーベン「第九」を意識していたのかもしれない。さすがです。この第九を宣伝するのは、日本で最初に俘虜収容所の外で第九が演奏されたと言われていたからであり、久留米の歴史秘話である。12月28日の演奏会を通じて、市内外に発信していきたい。ゆるキャラグランプリは最後だが、くるっばには、新たな仕事として「第九」の広報大使を任命したい。

### 市長からくるっばへ任命書の贈呈

【文化財保護課小澤主査】ドイツ人捕虜と久留米の人々との説明。市HPに掲載

(質疑なし)

## 5. その他

【記者】首里城で火災があり、人が集まるところにスプリンクラーが設置されていないことが原因であるが、市内で点検される予定はあるか。

【市長】しっかりと点検していきたい。

【記者】先日、サンライフ久留米の廃止を表明したがその見解は。共同ホールについては改めてどう考えているか。

【市長】前の市議会の一般質問で答えたとおりであるが、しっかり利用者の方への説明をしながらご理解を得ていくことに変わりはない。特に、サンライフの空調設備は大規模な修繕が必要であり、市中央部地域には類似する施設がある。この観点から説明をしていく。廃止決定から1年半が経過しており、利用者はじめ施設の指定管理者も不安定な状態で、事業を決めて実施していかなければならない。共同ホールに関しては、サンライフと同様に、施設の集約や効率化を図っていかなければならない。その時は、利用者との意見交換や市議会の提言も極めて重要である。ただサンライフと異なる点としては、空調設備など大規模修繕などの喫緊の課題がないため、来年速やかに動くような状況ではない。

【記者】共同ホールについては、再来年以降の廃止になるのか。

【市長】今後予算を編成する中で、最終的にはどうするか決めていくことになるであろう。